



令和5年(2023年)3月13日

テーマ展「大名の装よそおい—井伊家伝来装束を中心に—」を開催します

このたび、彦根城博物館において、みだしの展覧会を開催いたしますのでお知らせします。

記

1 展覧会名称

テーマ展「大名の装よそおい—井伊家伝来装束を中心に—」

2 会 期

令和5年(2023年)3月17日(金)～4月17日(月) *会期中無休

開館時間：午前8時30分～午後5時(入館は午後4時30分まで)

3 会 場

彦根城博物館 展示室 1

4 展示の趣旨

古来、衣服は、単に体を保護するだけでなく、形や色、素材などによって身分や地位を示すという役割も担ってきました。一定の規範にそった整った装よそおいは、日常の衣服とは区別して装束しょうぞくと呼ばれ、これらの衣服に関する規則のことを服制といいます。

日本における最も古い服制は、飛鳥時代のものです。奈良時代には、律令制りつりょうせいの官位に基づき、中国の装束に準拠した詳細な服制が定められました。平安時代になると、装束は日本の慣習や風土に適応して次第に和様化し、華やかな宮廷文化を背景に、束帯そくたいや衣冠い かんといった、現在まで受け継がれる伝統的な装束の基礎が確立します。これら朝廷に由来する装束は、公家装束と総称されます。その後、武家の勢力が拡大すると、その好みに適った直垂ひたたれをはじめとするより活動的な装束が台頭し、武家装束として発展していきました。一方で、公家装束は、鎌倉時代以降も武家政権の服制に礼装として取り入れられていきます。

江戸幕府の服制は、室町幕府に倣ったものです。公家装束である束帯と衣冠が最高位の格式の礼装とされ、将軍宣下や歴代将軍の大法会といった特に重要な儀礼の装束となりました。これらに次ぐ礼装に位置づけられたのが、武家装束の直垂です。左右の襟えりを引き合わせて着る上着はかまと袴を一揃いとし、年始に江戸城へ登城して将軍と対面する年始御礼な

ど、重要な行事で用いました。最も広く使用されたのが、袖の無い上着である肩衣かたぎぬと袴はかまを組み合わせた袴かみしもで、裾すその長い袴なががみしもを着ける礼装の長袴なががみしもと、通常の袴はかまを用いる平服の半袴はんかみしもとがありました。

このように、服制を遵守した儀礼によって、将軍は家臣を統制し、これに参加する大名は、将軍を頂点とする幕府の中における、自らの地位や家の格式を確認することにもなりました。また、装束は、将軍から大名へ、大名から藩士へ、功労に対する褒賞あるいは遺品分けとして下賜される場合があり、これによって主従の結びつきを確認し、また深めることにもなりました。

当館には、彦根藩主をつとめた井伊家の当主や世子の用いた装束が伝えられています。残された装束はごく一部ですが、これらは大名の装束の有り様をうかがうことができる貴重な資料です。本展では、井伊家伝来の装束を初めて公開するとともに、藩主の肖像や古文書をあわせて展示し、束帯や袴といった礼装を中心に江戸時代の大名の装いを紹介します。

5 展示作品

別添リストの38件

6 観覧料

一般 500円(450円)

小・中学生 250円(170円) ()内は30名以上の団体割引料金

*常設展「“ほんもの”との出会い」も併せてご覧いただけます。

7 関連事業

スライドトーク

日時：令和5年(2023年)3月18日(土) 午後2時～ *30分程度

会場：彦根城博物館 講堂

定員：50名(当日先着順)

参加費：無料 *展示室の入室には、別途観覧料が必要です。

講師：茨木恵美(当館学芸員)

問い合わせ先

彦根市教育委員会事務局

彦根城博物館 学芸史料課

担当：茨木恵美

(電話 0749-22-6100)

テーマ展「大名の装い—井伊家伝来装束を中心に—」展示作品リスト

※◎は重要文化財

番号	名称	数量	時代	所蔵
公家装束の伝統				
1	飾抄 源通方著（群書類従 巻114）	1冊	原本：鎌倉時代 刊行：江戸時代後期	当館（井伊家伝来典籍）
2	装束織紋図彙	1冊	江戸時代後期	当館（井伊家伝来典籍）
江戸幕府の服制と大名の装束				
◎ 3	武家諸法度写	1状	江戸時代 天保9年(1838)写	当館（彦根藩井伊家文書）
4	諸装束部略 竹尾善筑著	1冊	江戸時代 文政13年(1830)序	当館（井伊家伝来典籍）
5	服色図解 本間百里編	1冊	江戸時代 文化13年(1816)刊	当館（井伊家伝来典籍）
◎ 6	恒例臨時行事留帳	1冊	江戸時代 元文元年(1736)頃	当館（彦根藩井伊家文書）
東帯 —朝廷由来の最上の礼装—				
◎ 7	將軍宣下二付登城之式書	1状	江戸時代後期	当館（彦根藩井伊家文書）
8	井伊直孝坐像	1軀	江戸時代 文化5年(1808)	多賀大社（井伊神社伝来資料）
9	黒地雲鶴文袍	1領	江戸時代後期	当館（井伊家伝来資料）
10	纓	1流	江戸時代後期	当館（井伊家伝来資料）
11	石帯	2筋	江戸時代中期～後期	当館（井伊家伝来資料）
12	白紫綾唐草と橘紋平緒	1流	江戸時代後期	当館（井伊家伝来資料）
13	金平目梨子地鞘橘紋細太刀拵	1口	江戸時代前期	当館（井伊家伝来資料）
14	笏	1握	江戸時代後期	当館（井伊家伝来資料）
15	檜扇	1握	江戸時代後期	当館（井伊家伝来資料）
16	帖紙	2帖	江戸時代後期	当館（井伊家伝来資料）
17	浅沓	1両	江戸時代後期	当館（井伊家伝来資料）
18	沓台	1基	江戸時代後期	当館（井伊家伝来資料）
衣冠 —東帯につぐ高位の礼装—				
◎ 19	井伊直元願書	1状	江戸時代 文政11年(1828)	当館（彦根藩井伊家文書）
20	井伊直憲古写真	1枚	江戸時代後期	個人（三居孫太夫家文書）
パネル	井伊直中像	1枚	原本：江戸時代後期	天寧寺
21	中啓 波に松と千鳥図	1握	江戸時代後期	当館（井伊家伝来資料）
22	中啓 菊図	1握	江戸時代後期	当館（井伊家伝来資料）
23	中啓 紅葉賀図	1握	江戸時代後期	当館（井伊家伝来資料）
24	中啓 拝舞図	1握	江戸時代後期	当館（井伊家伝来資料）
25	夏扇	1握	江戸時代 安政3年(1856)	当館（井伊家伝来資料）
長袴 —大名の基本礼装—				
◎ 26	御勤向御召服年中行事	1冊	江戸時代 天保元年(1839)頃	当館（彦根藩井伊家文書）
27	浅葱地橘紋付長袴	1具	江戸時代後期	個人
28	紺地橘紋付熨斗目	1領	江戸時代後期	個人
29	黒蠟色塗鞘大小拵・小さ刀拵	1式	江戸時代後期	当館（井伊家伝来資料）
半袴 —大名の平服—				
◎ 30	御乗馬拝見被仰付候式書	1状	江戸時代後期	当館（彦根藩井伊家文書）
◎ 31	小納戸役日記	1冊	江戸時代 明和8年(1771)	当館（彦根藩井伊家文書）
パネル	井伊直弼像 井伊直安筆	1枚	原本：明治～大正時代	豪徳寺
装束の下賜と拝領 —主従の絆—				
◎ 32	拝領時服覚	1状	江戸時代 嘉永元年(1848)	当館（彦根藩井伊家文書）
33	黒地橘紋付袴	1具	江戸時代後期	個人
34	白無地橘紋付帷子	1領	江戸時代後期	個人
◎ 35	侍中由緒帳 巻5	1冊	江戸時代後期	当館（彦根藩井伊家文書）
◎ 36	大魏院様御遺物被進届	5冊	江戸時代 寛政11年(1789)	当館（彦根藩井伊家文書）
藩主の装束の調達				
◎ 37	四季着類近江屋小兵衛次郎兵衛江申付候定式帳	1冊	江戸時代 享保20年(1735)	当館（彦根藩井伊家文書）
38	御直垂色目	1状	江戸時代	当館（井伊家伝来典籍）

写真解説

1 井伊直孝坐像 1 軀 (作品リストNO. 8)

像高 45.5cm

江戸時代 文化5年 (1808)

多賀大社蔵 (井伊神社伝来資料)

東帯姿で表された井伊家2代当主直孝 (1590～1659) の彫像。文化5年 (1808)、11代直中 (1766～1831) の命によって作られ、井伊家歴代の菩提寺である清涼寺の護国殿に安置されました。眉を寄せ、厳しい表情をした威厳ある姿の像です。

東帯は、平安時代以来の伝統を有する最も格式の高い礼装です。一番上に身に着ける袍は、朝廷から授けられる位階によって色が定められていました。江戸幕府においても大名の格式を表すものとして位階を用いており、東帯を着用することができた五位以上の大名は、それぞれの位階の色の袍を使用しました。四位以上は黒色の袍とされていたことから、代々四位であった井伊家当主はこれを用いており、本像を含めた東帯姿の歴代の肖像は、いずれも黒袍を身に着けた姿で表されています。



東帯は、平安時代以来の伝統を有する最も格式の高い礼装です。一番上に身に着ける袍は、朝廷から授けられる位階によって色が定められていました。江戸幕府においても大名の格式を表すものとして位階を用いており、東帯を着用することができた五位以上の大名は、それぞれの位階の色の袍を使用しました。四位以上は黒色の袍とされていたことから、代々四位であった井伊家当主はこれを用いており、本像を含めた東帯姿の歴代の肖像は、いずれも黒袍を身に着けた姿で表されています。

2 石帯 2 筋の内1筋 (作品リストNO. 11)

帯長 69.5cm

江戸時代中期

当館蔵 (井伊家伝来資料)

石帯は、東帯を着用する際に、袍の上に結ぶ革製黒漆塗の帯。帯に石などで作られた飾りをつけることから、石帯の名があります。飾りの素材は玉を最上とし、このほか瑪瑙、犀角、蠟石などがあります。



これは白の蠟石を用いた石帯。蠟石は、蠟のようになめらかで緻密な鉱石です。紐は白、萌黄、紫の組紐とし、金具の側面には井伊家の家紋である橘紋が表されています。箱に記された「閏十二月二日御召」の墨書から、延享2年 (1745) 閏2月2日に行われた徳川家重の將軍宣下に参列した、8代直定 (1702～1760) もしくはその世子の直禎 (後の9代当主、1727～1754) が用いたものとみられます。



金具の橘紋

3 白紫綾唐草と橘紋平緒 1流 (作品リストNO.12)

帯：長 192.0cm 幅 4.5cm

垂：長 59.8cm 幅 9.5cm

江戸時代後期

当館蔵 (井伊家伝来資料)

平緒は、束帯を着用する際に使用する、太刀を佩く（腰に吊る）ための帯。これは、腰に巻き太刀を吊る帯と腹前の垂とを別に仕立てた、切り平緒とよばれる形式です。白と紫とを交互に配した帯地に、萌黄、紅、黄の糸で井伊家の家紋である橘紋と唐草文様を刺繍し、縁にも複雑な刺繍を施しています。「若殿様御官服御用」と記された箱に石帯と共に納められていることから、束帯を着用する儀礼に参加した世子が用いたものと考えられます。大名家の礼装にふさわしい華やかな帯です。



上が帯、下が垂



垂の橘紋

4 浅葱地橘紋付長袴 1具 (作品リストNO.27)

肩衣：裨 37.0cm 丈 68.0cm

長袴：丈 166.9cm

江戸時代後期

個人蔵

袴は武家装束の一種です。同じ裂で仕立てた、袖のない上着の肩衣と袴のセットで、丈の長い袴を着用するものを長袴といいます。江戸幕府の服制における武士の基本礼装で、正月3日に江戸城で能の謡始めを行い、將軍から盃を賜る謡初や、3月3日の上巳の節句、5月5日の端午の節句といった年中行事などで用いました。

これは、旧彦根藩士の家に伝来した長袴で、橘紋が表されていることから井伊家からの拝領品とみられます。井伊家伝来品ではありませんが、井伊家の当主が用いた長袴は、このようなものだったと考えられます。



肩衣



長袴

5 小納戸役日記 1冊 (作品リストNO.31)

重要文化財

縦 28.8cm 横 20.4cm

江戸時代 明和8年 (1771)

当館蔵 (彦根藩井伊家文書)

主に藩主が使う道具の管理を担当した役職・小納戸役の職務日誌。藩主の一日の行動とともに、その日、使用した装束や刀などが記されています。これは、10代直幸 (1732~1789) が彦根在国中の明和7年 (1770) 閏6月7日~翌年3月21日までの記録です。

その内容から、行事や儀礼の内容と重要度によって装束を使い分けていたこと、また、複数の行事がある場合は、日に複数

回の召し替え (着替え) を行っていたことが分かります。例えば、藩主と家臣全員が対面する惣出仕や清凉寺への参詣といった定例の行事では、肩衣と足首までの袴を着ける平服の半袴、参詣のなかでもより重要な祥月命日 (故人の亡くなった月日と同じ月日) や清凉寺以外の寺社への参詣などでは、礼服である長袴が用いられました。井伊家の当主がどのように装束を用いていたのかを、具体的に知ることができる貴重な史料です。

